

〔巻頭言〕

わからないことに耐えていく力

札幌学院大学大学院臨床心理学研究科 齊藤美香

臨床心理士資格ができてから、30年となる。そして、いま、歳月を経て、国家資格の公認心理師資格が誕生した。隔世の感を感じる。私が大学院に在学していた頃は今のような指定校制度はなく、指導教員が課す、毎週10冊（Binswanger, Jaspers, Merleau-Ponty, 木村敏など）の文献を意味も理解しないままひたすら読み倒すことと、ドイツ語の精神医学のテクニカルタームの暗記、心理検査の逐語記録による事例検討などに追われていた。附属の臨床心理相談室で受け持つケースは2ケースほどだったにもかかわらず、M1になった途端に指導教員から「現場に突撃せよ」と言われ、有無を言わず、病院のテスターなどのアルバイトに赴いた。更には、個人スーパービジョンというシステムはなく、グループスーパービジョンでケース発表をすると、先輩や先生方に辛辣なコメントをされ、泣く人も続出であった。院生のちっぽけな自負心は吹き飛び、人間の存在は何なのか？自分は患者さんに向き合っていたのか・・・答えのない暗いトンネルを歩き続けた。一つのケースをあーでもないこーでもないと、習ったばかりの理論にあてはめたり、文献をあさったり、仲間と議論したり、多くの時間を思索に費やした。先生方に何かを教えてもらうのでもなく、クリアに答えが記載している文献もなく、先生方や先輩達のケース発表や精神科医の診察の陪席の際、アンテナをはりめぐらせ、その技を見よう見まねで盗むという感覚であった。泥臭い学び方であった。今のような、エビデンスに基づく、スタイリッシュな研修会などなかった。しかし、明確な答えのない曖昧さを抱えたまま歩むことで、曖昧さに耐えられる強さは鍛えられたのかもしれない。心理療法のプロセスは答えのない道をクライアントと共に歩いていくようなものである。人生もまた答えのない道である。

ひるがえって、現在の臨床心理養成教育や卒後研修は、たくさんの研修会があり、自分の学びたいものを選択することができる。ベーシックからアドバンスなどと系統的なカリキュラムを提供しているものもある。EBP（Evidence-Based Practice）の時代に変化しつつある。臨床家が専門家として、どうあるべきかが明示されるようになったことは臨床家の教育にとっても大きな前進である。しかし、心のどこかで、正直、懸念を感じる部分もある。人の心はそんなにクリアに割り切れ、解明されるものだろうか…。役に立たないもの（生産性や効果のないもの）は意味がないと切り捨てる風潮に臨床家もならないだろうか…。

患者さん自身、希望が見えないと感じている暗闇に目を背けず、重みとわからなさや曖昧さに共に耐えながら歩む姿勢は時代が変わっても、どのような流派であっても不可欠なことであると思う。

私は精神分析を専門とする端くれにいる。精神分析は残念ながら、落日の一途ではあるが、心理臨床の世界にも合理性が重視されるいまの時代においては、隅の親石（詩篇118・22-23）であると信じている。